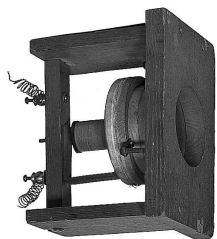


電話機のおゆみ

1876

ベル電話機



明治9年

1837年、ペイジ(米)は、磁力が鉄片をひきつけ、音を発する「流電音(ペイジ音)」を発見、また、1861年、フリッパ・ライス(独)は、いかなる音も電氣的に伝送・再生することができることを証明、その自作装置に「テレフォネ」と名づけ、電話の理論を発表した。しかし、対話できる実用的な電話機は、1876(明治9)年、アレキサンダー・グラハム・ベル(米)によって発明され、写真は、その原形である。わが国に電話機が渡来したのは、ベルの発明からわずか1年後の1877(明治10)年である。当時、横浜にあったナヴィア商会によって、商品化されていた2個の電話機が輸入されたといわれている。

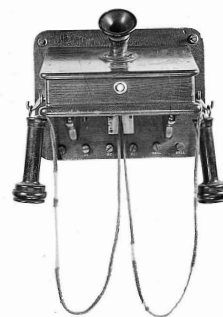
音声による振動板の振動に伴って空気の流れが変化し、永久磁石と巻線が構成する磁力線に変化を与えることにより音を電流に変え、また、到着した電流の変化による巻線と永久磁石の磁力線の強弱によって振動板を振動させ、音を再生する。

特徴

送話器・受話器が同形である。電池を使用しないので、微かな音しか発生せず、数十メートルの近距離にしか通話できない。(注)送話器は、その後種々の改良が試みられたが、受話器は、この原理が現在でも使われている。

1890

ガワーベル電話機



明治23年

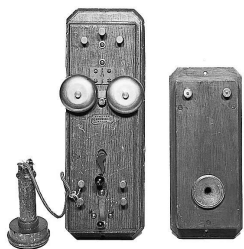
1887(明治20)年、イギリスからガワーベル電話機が輸入され、創業前の電話機選定試用に終止符が打たれた。1889(明治22)年、東京一熱海間で行われた長距離通話実験(初の一般公衆通話となる)に使用され好結果を示し、翌1890(明治23)年12月16日の電話創業時に採用され、わが国最初の実用機として1896(明治29)年までの6年にわたり活躍した。1879(明治12)年、ガワー(英)が発明した送話機とベル電話機を組み合わせで作られたので、ガワーベル電話機と呼ばれた。

特徴

ガワー送話器は、音声に敏感に応じる炭素棒を使用し、かつ通話回路と炭素棒との接触点を多くして安定度を高めている。電話局の呼び出しはボタンを押し、ダニエル電池10個による直流電流を送る。局からの呼び出しは継電器と羽子板電鈴で受ける。

1878

国産1号電話機



明治11年

輸入されたベルの電話機は、さっそく工部省で通話実験された。一方、電信局製機所では、この電話機をもとに模造を企て、1878(明治11)年6月、2台の電話機を完成させた。これが、わが国最初の国産電話機となった。このあと、同一のものを約5年間に41台製作したが、音声微弱などの理由で1883(明治16)年に製作を中止した。その後、1887(明治20)年頃までの間、エジソンの炭素電話機、アデル電話機などの模造を行っている。

特徴

送話器が永久磁石を中心とした構成で、電池を使用していないため、受話がどうしても微弱となる欠点を持っている。

1896

デルビル磁石式壁掛電話機



明治29年

1896(明治29)年7月、これまでのガワーベル電話機に代わり、より高感度のデルビル送話器を用いたデルビル磁石式電話機が採用された。このデルビル電話機は、その後、共電式・自動式と並行して小規模局で1965(昭和40)年頃まで約70年間使用された。一般に「磁石式電話機」という名称が固定して使われるようになったのは、磁石式発電機を持つこの電話機以後で、以前のものは単にガワーベル電話機、エジソン電話機などと呼ばれた。

特徴

ガワー送話器に用いられていた炭素棒を炭素粒にかえ、接触点をさらに増して感度を高くするとともに、送話回路に誘導線輪を挿入して通話電流を大きくした。電話局の呼び出しは、電話機内部の磁石発電機を回し、電流を送る。また、局からの呼び出しも初めは手回し発電機、後に交流発電機によってベルを鳴らした。

電話料金

1890(明治23)年		1892(明治25)年
電話創業		
市内通話	東京 年額使用料 40円 横浜 年額使用料 35円	全国均一定額料金 年額使用料 35円
市外	東京～横浜間通話料 (5分) 15銭	

1897(明治30)年	1899(明治32)年
	長距離市外通話開始
都市によって異なる電話使用料金(3種類)となる例) 東京、大阪で 年額使用料 66円 京都、横浜、名古屋、神戸で 年額使用料 54円 その他 年額使用料 48円	
東京～横浜間通話料 (5分) 20銭	東京～大阪間で長距離市外通話が始まる 通話料金 (5分) 1円60銭

1897

デルビル磁石式甲号卓上電話機



明治30年

1897（明治30）年12月、初めての卓上形電話機としてデルビル磁石式甲号、乙号の2種が登場した。当時、電話機の発達にエポックを画したものといわれ、電話の実用価値を増すと同時に装飾品としても役立つようデザイン面にも細かい注意が払われている。なお、付加使用料年額6円を要した。甲号電話機には、当初のものと1916（大正5）年から登場した四角いきょう体の新形と2つの形態があり、写真は新形である。

特徴

送受話器は、デルビル壁掛形と同性能。甲号は送受話器を同一手で連結してあるが、乙号は壁掛形と同様別々となっている。いずれも発電機、誘導線輪および磁石電鈴を同一の箱に納め、性能は同じである。
*同系機種
デルビル磁石式乙号卓上電話機

1903

グースネック共電式壁掛電話機



明治36年

1903（明治36）年5月、初の英国製共電式交換機が京都局に導入され、同時に付随してグースネック共電式電話機が購入・採用された。共電式は、利用者が受話器をとるだけで局を呼び出せるという便利な点のほか、電源を局内に集中してあるため、電話機障害が少なく、保守・交換作業が能率化され、また、発電機、電池が不要のため電話機の小型化・簡素化が図れるなどの利点を持っている。反面、当初、湿気などが原因で起こる線路の絶縁低下による疑似信号の発生が問題とされた。このため、湿気の少ない京都局が最初の共電式局となった。

特徴

送話器にはソリッドバック送話器を使用。受話器には2本の棒状永久磁石を結合した双極形のものを使用した。腕金の先端に送話器をつけた格好が“ガチョウの首”に似ているところから“グースネック”と呼ばれた。

1899

ソリッドバック磁石式壁掛電話機



明治32年

1899（明治32）年2月、東京—大阪間の長距離電話回線の完成により、長距離通話用としてソリッドバック電話機が採用された。当時長距離通話の利用者は、年額6円の付加使用料を支払い、長距離通話加入者となる必要があった。開通当初、東京・大阪とも各178加入者でスタート、通話は近距離に劣らず良好であった。その後、神戸、京都などサービス対地も広がり、利用者も増大した。

特徴

ソリッドバック送話器は、炭素粒の前後に振動板を配して感度の上昇と雑音の排除を効果的にしている。また、電池は、フーラー電池を使って電圧を上げるなどして電流を大きくしたので、長距離用に適した。

1909

2号共電式壁掛電話機



明治42年

京都に続いて1909（明治42）年、東京、大阪、名古屋の一部で共電式が採用された。この頃には共電式の欠点であった線路の絶縁低下の問題はエナメル線などの開発によって解決され、以後、大正期を通じ次々と共電式に改められていった。2号共電式電話機は、本格的な共電式時代を迎え国産化した最初の共電式電話機である。

特徴

送話器にはソリッドバック送話器を使用。受話器は有極電磁石を使った回路が採用されているほか、形態が簡素なものとなった。
*同系機種
2号共電式卓上電話機

電 話 料 金	1920（大正9）年		1924（大正13）年	
	市内通話	東京年額基本料 45円 東京、横浜、名古屋、大阪、京都、神戸の6大都市で市内通話料が度数制となる 度数料 2銭（市内通話1度ごと）	度数料 3銭 （市内通話1度ごと）	
市外				

1942（昭和17）年		1944（昭和19）年		1946（昭和21）年	
東京年額基本料金 60円 度数料 5銭 （市内通話1度ごと）	度数料 東京 10銭 （市内通話1度ごと）	東京月額基本料 24円 度数料 20銭 （市内通話1度ごと）			
	東京～大阪間3分ごとに2円	東京～大阪間3分ごとに7円50銭			

1927

2号自動式卓上電話機



昭和2年

関東大震災以後の復旧を機会に、これまで限界にあった手動交換方式を自動交換方式の導入によって解決することになった。1926（大正15）年1月、初めて東京にA形、横浜にH形の自動交換局が設けられた。最初の自動式電話機は、それぞれの交換機に付随したものであり、その後の増加分は2号共電式電話機に1号ダイヤルを組み合わせたものであったが、ダイヤルすると受話器に雑音が入る欠点があった。1927（昭和2）年、これを改良した2号ダイヤルを取り付けたA形・H形共用の2号自動式電話機が採用された。

特徴

自動式電話は電圧が48V(H形は60V)と高く、当時、電話機の選定には、かなりの論議を呼んだが、電話機製造の経済化、機種の一統化などの面で行き得るだけ2号共電式と共通のものを採用することとした。したがって、形態は2号共電式にダイヤルをつけた形となっている。
*同系機種
2号自動式壁掛電話機

1933

3号自動式卓上電話機



昭和8年

1933（昭和8）年、送・受話器を連結した斬新なスタイルの3号電話機が誕生、以降いろいろな電話機のスタイルの原形となった。以来、わが国の代表的な標準電話機として約30年にわたって活躍した。戦後、電話の復旧に標準電話機の生産が間に合わず、応急処置として、メーカーの私設交換機用在庫の中から標準機と同等の性能のものを購入し使用した。これらに“富士形”“イー661”などがあった。

特徴

きょう体にベークライトが初めて使用され、送話器には、炭素粉を使ったソリッドバック形を用い、炭素粉の凝固、低感度を解決するため、防じん・防湿措置のほか、側音防止回路を初めて採用した。
*同系機種
3号自動式壁掛電話機
3号自動式富士形電話機
3号共電式卓上・壁掛電話機
3号磁石式卓上・壁掛電話機

電話料金

	1947（昭和22）年	1948（昭和23）年	1951（昭和26）年
市内通話	東京月額基本料 住宅用 75円 事務用 120円 度数料 50銭 (市内通話1度ごと)	東京月額基本料 住宅用 300円 事務用 480円 度数料 2円 (市内通話1度ごと)	東京月額基本料 住宅用 380円 事務用 540円 度数料 5円 (市内通話1度ごと)
市外	東京～大阪間 3分ごとに38円	東京～大阪間 3分ごとに152円	市外通話は即時扱いと 待時扱いを料金区別

1950

4号自動式卓上電話機



昭和25年

戦後、従来の3号電話機の性能をさらに上回る新形電話機の研究開発が進められ、1950（昭和25）年、性能、デザインともに世界の水準をしのぐ電話機として、4号自動式電話機が誕生した。“ハイ・ファイ電話機”といわれるほど感度が高く、そのためケーブルの細芯化にも大きな効果をあげた。同年、東京・丸の内局など6局で商用試験が行われ、1952（昭和27）年から本格的な4号化が進められた。

特徴

送・受話器内の振動板を従来の軟鉄振動板から軽量なジュラルミン製を用いて共振周波数を高くし感度をあげている。ケーブルは、従来の最小線径0.5ミリ（1,800対）を0.4ミリ（2,400対）に細芯化することができ、ケーブルの経済化・多対化が可能となった。
*同系機種
4号自動式壁掛電話機
4号共電式卓上・壁掛電話機

1953

23号自動式壁掛電話機



昭和28年

1950（昭和25）年頃は自動改式当初の2号自動式壁掛電話機が旧形のまま20万台弱使われていた。しかし、この電話機は、伝送特性が悪く、また、部品材料も旧形のままであったため、1953（昭和28）年7月、3号自動式電話機と同一の伝送特性および品質に改善し、23号自動式電話機として使われた。1959（昭和34）年頃から順次淘汰された。

特徴

改善部品は、送話器、誘導線輪、端子板および回路などである。
*同系機種
23号共電式壁掛電話機

1953（昭和28）年	1962（昭和37）年
東京月額基本料 住宅用 700円 事務用 1,000円 度数料 7円 (市内通話1度ごと)	市外通話料に距離別時間差法導入 東京月額基本料 住宅用 700円 事務用 1,000円
	東京～大阪間 4秒7円

1962

600形自動式卓上電話機



昭和37年

1962（昭和37）年3月、東京都下昭島局での商用試験を皮切りに登場した600形電話機は、通話性能と経済性の上で完成された電話機といわれている。

その後、全国的な商用試験を経て、1963（昭和38）年から全面的な600形電話機の導入が図られ、1971（昭和46）年からは、ホワイト、グレー、グリーン3色によるカラー化も始められた。ここに通話機能においてほとんど申し分のない電話機の出現を見ることができた。

特徴

4号電話機の3倍以上も感度が高く、これによりケーブルの細芯化は、さらに0.32ミリ(3,600対)まで可能となった。
また、初のプリント配線の導入により信頼性、量産性を増している。デザイン面では送受話器が自然に正しい位置に収まるようにし、また、ダイヤル面もボディに埋め込むなど細かい配慮がなされている。
*同系機種
600形自動式壁掛電話機

1969

プッシュホン



昭和44年

コンピューターの開発は、データ通信という新しい通信分野を生み出した。こうしたコンピューターと連結できる電話機として、通話以外の機能を持つ新しい電話機“プッシュホン”が誕生した。電話機“プッシュホン”が誕生した。短縮ダイヤルなど従来の電話機のイメージを変える機能を持っている。

また、1972（昭和47）年9月からは、従来のグレーに、ホワイト、グリーン、レッドを加えて4色となった。

特徴

ダイヤリングは、数字ボタンを押すだけでなく、これによって特定の周波数の音声信号を発信し、これが交換機を作動させる。ダイヤル数字のほか、2つの機能ボタンがあり、これは短縮ダイヤルなどのキー・ボタンの役を果たす。
*同系機種
プッシュ式ホームテレホン
プッシュ式ビジネスフォン

電話料金

	1969（昭和44）年	1972（昭和47）年	1976（昭和51）年
	級局を5段階とする	広域時分制の導入	
市内通話	東京月額基本料 住宅用 900円 事務用 1,300円	市内通話の料金度数制を改め時間制（3分）を採用	東京月額基本料 住宅用 1,350円 事務用 1,950円 度数料 10円
市外			東京～大阪間 4秒10円

1985

留守番電話機レポンスⅢ形



昭和60年

1985（昭和60）年4月から本電話機が自由化され、自分の好みの電話機を選べるようになり、さまざまな形や機能を持った電話機が登場した。

特徴

「レポンス」は、留守番電話機能を備えた電話機で、応答専用機、マイクロカセットテープ1本の応答録音機、標準カセットテープ2本を使用する応答録音機の3タイプがあった。

1987

クローバーホン



昭和62年

1983（昭和58）年12月から単体電話機のメイン商品としてプッシュホンハウディシリーズを提供してきたが、デザイン重視・OPD電話機およびスイッチャブル電話機が主流である単体電話機市場に対応するため、プッシュホンハウディシリーズの後継機種として、ハウディ・セレクトとともにクローバーホンを5月から発売した。

特徴

シンプル&リーズナブルなデザインに加え、低価格であるため、単体電話機の中でも特に人気がある。タイプには、クローバーホンyou(ヨコ形)とクローバーホンme(タテ形)があり、色はクリアホワイトほか6色と豊富である。機能面では、(1)DP/PBスイッチャブル(2)再ダイヤル(3)着信音量切替(4)保留音送出(ノクターン/メヌエット)と簡易な機能で経済化を図り、販売価格は12,800円と手ごろである。

1977（昭和52）年	1983（昭和58）年	1985（昭和60）年
	長距離市外通話開始	端末機器の開放
東京月額基本料 住宅用 1,800円 事務用 2,600円		東京の回線使用料 住宅用 1,550円 事務用 2,350円
	東京～大阪間 4.5秒10円	

民営化以降については、本文をご参照ください。

1988

ハウディ・コードレスホン
パッセ



昭和63年

1980（昭和55）年5月、初めて登場したコードレスホンは、普通の電話機が持ち運べるという形のものであった。レンタル商品としてのみ提供してきたコードレスホンは、1987（昭和62）年10月に電波法改正により自由化されたことからお買い上げいただくことができる商品が登場した。

特徴

「ハウディ・コードレスホンパッセ」は、小電力タイプのコードレスホンで、通話可能範囲は接続装置から半径100メートル程度（見直し距離）でフル充電しておけば、連続4時間程度通話可能。

1995

デジタルコードレスホン
ヒットS100-Sセット



平成7年

1995（平成7）年7月、デジタルコードレスホンの子機を屋外に持ちだせるPHS（パーソナルハンディホンシステム）サービスを開始した。

特徴

「デジタルコードレスホンピエット S100-Sセット」は、PHSサービスに対応できるほか、同一の接続装置に登録した2台を持ち出しトランシーブのように使用することも可能。「ピエット」とは、“Personally I Enjoy Talking”の頭文字をとって「Piet」とし、「街角でおしゃれな電話機を持ちながら、自由に会話を楽しむ」という意味。また、英語（スコットランド地方）の俗語では、鳥類の「カササギ」から転じて「おしゃべり」という意味もある。

1996

NTT FAX T-219CL
（でんえもん219CL）



平成8年

1991（平成3）年から「でんえもん」の愛称で提供してきたホームファクスは、留守番電話機能やコードレス子機を付加しながら普及していった。

特徴

「でんえもん219CL」は、留守番電話機能とコードレス子機を搭載したホームファクス。コードレス子機個別にダイヤルインを設定できる「子機別ダイヤルイン機能」やマイクロカセットを使用しないIC録音方式による「デジタル留守録」機能を搭載。

1997

ハウディ・デジタル
コードレスホン DCP-4100



平成9年

1998（平成10）年2月のナンバー・ディスプレイ提供開始に先駆け、1997（平成9）年11月、ナンバー・ディスプレイ対応デジタルコードレスホンが登場した。

特徴

「ハウディ・デジタルコードレスホン DCP-4100」は、親機、子機のディスプレイに、かけてきた方の電話番号が表示され、あらかじめ登録した方からの電話は、名称も表示し、しかも、着信音も変えられる。また、かかってきた方の電話番号を5件まで蓄積できるなど、ナンバー・ディスプレイをより便利に使うためのデジタルコードレスホン。なお、デジタルコードレスホンは、アナログ方式に比べ、通話品質や盗聴に対する防止機能も格段に向上した商品。

1998

マルチメディアホン
テレッセ



平成10年

1998（平成10）年11月、誰にでも簡単にインターネットが利用可能な大型ディスプレイを搭載したマルチメディアホンが登場した。

特徴

「マルチメディアホン テレッセ」はディスプレイのアイコンメニューをタッチすることでホームページへのアクセスや電子メールの送受信、留守番録音、ファクシミリの送受信などが簡単に操作可能なマルチメディアホン。低価格なISDN端末であり、インターネットを行いながら電話でお話ができたり、インターネットホームページからの電話番号検索など多彩なサービスで女性層から好評を得ている。

2000

コードレスホン
ハウディ デジタル
DCP-4400



平成12年

2000（平成12）年10月、ナンバーディスプレイやキャッチホン・ディスプレイに対応したハウディ デジタルコードレスホンの最新機種に、オプションのアダプターを接続することにより、ワイヤレスでインターネットも楽しめるタイプが登場した。

特徴

「ハウディ デジタルコードレスホン DCP-4400」は、「可動式大画面」を搭載し、ナンバーディスプレイやキャッチホン・ディスプレイ対応機能をより便利に使うことができます。また、オプションの「ワイヤレスモデムアダプターA」を利用することにより、モデム内蔵パソコンやBSデジタルチューナーをワイヤレスで接続することが可能となり、わずらわしい配線なしで家中どこでもインターネット通信ができる商品。

1999

「i」シリーズ
ISDNコードレスホン
「POOOO」



平成11年

1999（平成11）年5月、ISDN専用の電話機としては、初めてコードレスホンにDSUとターミナルアダプター機能を内蔵したタイプが登場した。

特徴

「i・トレンビー」シリーズは、これまでISDNを利用する際に不可欠であった回線終端装置（DSU）とターミナルアダプターをコードレスホンに内蔵したタイプ。オプションの「ワイヤレスパソコンアダプター」を接続することにより、「インターネット配線いらず」をコンセプトにわずらわしい配線なしにワイヤレスで家中どこでもインターネットも楽しめるようにした商品。

2001

デジタルコードレスホン
DCP-5500L



平成13年

2001（平成13）年6月に家庭の電話機からも簡単にメールやインターネットが楽しめる「Lモード」サービスの提供開始に先駆け、2001（平成13）年5月、「Lモード対応コードレス」シリーズが登場した。

特徴

「デジタルコードレスホンDCP-5500L」は、Lモードを契約することにより、コンテンツ提供者のサイトの閲覧、Eメールの送受信が可能。はじめて漢字対応の可動式大画面も搭載した「ダブルあんしんコードレス」。オプションの「ワイヤレスモデムアダプターA」にBSデジタルチューナーなどを接続することにより、電話回線のない部屋でも双方向サービスやインターネットを楽しむことが可能な商品。

2002

デジタルコードレスホン
DCCP-560L



平成14年

2002（平成14）年7月からサービス開始のナンバー・ディスプレイのオプションサービスであるネーム・ディスプレイに先駆け、2002（平成14）年5月、ネーム・ディスプレイ対応のデジタルコードレスホンが登場した。

特徴

「デジタルコードレスホンDCP-560L」は、ネーム・ディスプレイを契約することにより、かけてきた相手の「会社名」や「名前」がディスプレイに表示される。また、Lモードを契約することにより、生活に役立つ情報を閲覧したり、メールの送受信が可能な商品。コードレス電話機での通話は、デジタル方式を採用しているため、アナログ方式に比べて雑音が少なく、オプションの「ワイヤレスモデムアダプタ」にBSデジタルチューナーなどを接続することにより、電話回線のない部屋でも双方向サービスやインターネットを楽しむことが可能な商品。

2004

IPテレビ電話端末
フレッツフォンVP1000



平成16年

2004（平成16）年9月からフレッツサービスに対応した新たなIPテレビ電話端末「フレッツフォン VP1000」が登場。

特徴

「フレッツフォン VP1000」は、「Bフレッツ」および「フレッツ・ADSL」に対応し、従来のISDN対応テレビ電話機をはるかに上回る高品質の映像・音声通信を可能としたIPテレビ電話端末。専用のWebブラウザやメールソフトを搭載しているため、インターネットコンテンツの閲覧やメールの送受信も可能。タッチパネルによる簡易な操作性により、パソコンを使ったことがない方でも安心して簡単にご利用いただける「ブロードバンド時代の黒電話」を創出することをめざした商品。

2003

Lモード対応ホームファクス
でんえもん760LC



平成15年

2003（平成15）年7月から提供開始の「Lモード」の新サービス「写真Lメール」に対応した、「写真Lメール」機能および「イラストLメール」機能対応Lモード対応ファクスが登場した。

特徴

「でんえもん760LC」は、ファクス本体に脱着可能なカメラを搭載し、「写真Lメール」を利用して、撮った写真を送信することを可能とした。この「写真Lメール」はすべてのLモード対応機器、パソコン、携帯電話で見ることができるため、パソコンなどが苦手な方でも、気軽に写真の送受信ができるようになり、より幅広い層の人々が、写真を用いたメールを楽しめるようになった。

2005

ひかりパーソナルフォンWI-100HC
無線IP電話機



平成17年

2005（平成17）年11月より、BフレッツのIP電話サービス「ひかり電話」の新たな付加サービス「複数チャネル（ダブルチャネル）」、「追加番号（マイナンバー）」に対応した無線IP電話機「ひかりパーソナルフォンWI-100HC」が登場。

特徴

「ひかりパーソナルフォンWI-100HC」は「ひかり電話」、および「ひかり電話」の新たな付加サービス「複数チャネル（ダブルチャネル）」、「追加番号（マイナンバー）」を組み合わせることで、ご家族やSOHO事業所で個人ごとに電話番号を使い分けることを可能とした。また、携帯電話と同程度のコンパクトなデザインで、ご家庭や事業所内で常時携帯可能な商品。

2007

IPテレビ電話端末
フレッツフォンVP100



平成19年

2007（平成19）年3月にひかり電話・フレッツサービスに対応した簡単にIPテレビ電話が始められる「フレッツフォンVP100」が登場。

特徴

「フレッツフォンVP100」は、FOMAとのテレビ電話、フレッツ・ドットネットナンバーに対応した低価格な普及版のIPテレビ電話専用端末。ユーザーの使いやすさを重視し、これまでの電話機と同じインターフェースを継承することで安心して簡単に利用することが可能。ブロードバンド時代、ブラウザやメールはパソコンで、テレビ電話は専用機で使い分ける贅沢を、お求めやすい価格で提供する商品。

2009

高音質電話機
ひかりクリアフォンHQ-100



平成21年

2009（平成21）年2月にNGNサービス「フレッツ 光ネクスト」において「ひかり電話」をご利用のお客さま向けに高音質電話機 ひかりクリアフォン「HQ-100」が登場。

特徴

高音質電話機 ひかりクリアフォン「HQ-100」は、「フレッツ 光ネクスト」の「ひかり電話」に対応した、個人向けIP電話機。従来の電話機で使用している周波数帯（300Hz～3.4kHz）よりも広帯域（100Hz～7kHz）での音声通話ができるため、クリアで聞き取りやすい音声で会話を楽しむことができる。また、通話先が従来の電話機であっても、高音質電話機 ひかりクリアフォン「HQ-100」に備わった擬似広帯域通話機能により、従来の通話に比べ高音の帯域を広げた、300Hz～約6kHzの擬似広帯域音声での通話も可能な商品。

2008

ひかり電話対応ホームテレホン
IPテレホンUD



平成20年

2008（平成20）年3月に最大2ch/5番号を利用可能でユニバーサルデザインにも配慮した誰にでも使いやすい「IPテレホンUD」が登場。

特徴

「IPテレホンUD」は、ユニバーサルデザインに配慮して作られた、誰にでも使いやすいIP電話システム。主装置配下に内線端末を最大8台接続することができ、最大で2ch/5番号を利用可能。また、主装置配下にUD映像アダプターを接続することで、カメラフォンからの着信をFOMA端末に転送することも可能。多機能性と使いやすさをめざした商品。

2011

IPテレビ電話端末
ひかりフレッツフォンVP3000



平成23年

2011（平成23）年2月に「フレッツ光」のひかり電話サービスに対応した簡単な操作かつ高音質・高品質なテレビ電話が利用可能な「ひかりフレッツフォンVP3000」が登場。

特徴

「ひかりフレッツフォン VP3000」は「フレッツ光」を利用し、簡単タッチパネル操作の「テレビ電話」や「デジタルフォトフレーム」などの機能を搭載したお求めやすい価格のIPテレビ電話端末。誰もが使いやすく利用しやすいを理念としてデザインしており、2010年度の「グッドデザイン賞」を受賞。またカスタマイズすることで、IRUエリアの自治体などに「IP告知端末」などのさまざまな用途にご活用いただくことが可能な商品。